

「被害と加害の逆転現象」から生まれる人間関係



橋本 和明 (花園大学社会福祉学部教授)

今やドラマ『半沢直樹』が大流行である。堺雅人が演じる銀行員の主人公・半沢直樹の台詞である「やられたらやり返す」、「倍返しだ」が子どもたちの間でもしばしば口にされるらしい。このドラマは不正を明らかにしようとして奮闘する主人公が上司からおとしめられ、危機一髪のところで反撃し勝利を勝ち取る。確かに、視聴者は敗者の立場から勝者に逆転する物語の展開のスリリングさに魅了され、「やられたらやり返す」という爽快さに取り憑かれる。

しかし、この「やられたらやり返す」という関係を少し立ち止まって考えてみたい。たとえば、ある店員のちょっとした過失に憤慨した客が店員に土下座をさせ、逆にそれが刑法の強要罪に当たるとその客が逮捕されるという事件があった。一体、どちらが被害者、あるいは加害者なのだろうか。このように被害と加害が錯綜し、双方が簡単に入れ替わってしまう「被害と加害の逆転現象」は現代では至るところに見られる。たわいもないトラブルでも、すぐにそれが裁判所の法廷論争にまで発展してしまうことさえある。そんなケースに限って、紛争がいつまで立っても出口を見出せず長期化する。学校現場のいじめの現象もまさに「被害と加害の逆転現象」が生じている。いじめられていた者が何かの拍子でいじめの側に回り、いじめの加害者がアッという間に被害者に転じる。この移り変わりの激しさに、子どもたちはいついじめの側、もしくはいじめられる側に身を置かれるか不安でたまらず、深い人間関係を築くのを自然と避けてしまう。

虐待の問題も、この「被害と加害の逆転現象」が顕著に現れる一つと言える。例えば、子ども時代に親からのひどい虐待の被害を受けてきた者が、今度は自分が親になるとわが子に虐待をしてしまう。この「世代間伝達」は、本人が意識していなくても、「やられたらやり返す」という構図に知らぬ間にはまってしまう。虐待を受けた子どもが思春期以降になって、これまで虐待を加えてきた親に家庭内暴力という形で反抗したり、あるいは他者に暴力を振ったり、DVの加害者に姿を変えたりもする。これらも「被害と加害の逆転現象」と捉えられる。いずれの場合も、本人はいつ被害者の立場から加害者に移行したのかの自覚がない場合がほとんどである。

この「やられたらやり返す」という人間関係は、ある意味、現代の人間関係の特徴を示すものとも言えるかもしれない。一昔前なら、権力者と非権力者が明確に区別され、不正があっても弱い者は泣き寝入りをさせられていた。その時代には人権が軽視され、悪がはびこりやすい社会制度があったからである。その意味では、半沢直樹まではいなくても、それなりの悪や不正を明るみに出せる社会は望ましいことと言えよう。いじめについても同様である。一昔前のいじめは、『ドラえもん』に出てくるのび太とジャイア

ンの関係が典型的であるように、のび太はいじめられっ子、ジャイアンはいじめっ子というおきまりのパターンがあった。現代のいじめに見るように、いじめっ子といじめられっ子がコロコロ変わることはなかった。その固定した関係が先ほどの権力者と非権力者の関係のように、よくも悪くも一種独特の安定感を抱かせるところもあったに違いない。そう考えると、現代のいじめは、加害と被害が容易に逆転してしまうところに強い不安感が煽られてしまう。そして、被害と加害が常に逆転していくその先には何が待ち伏せしているのだろうか。そこには、真の幸福感や充実感が果たしてあるのだろうか、あるいは人間関係に疲れ果てた虚無感や不毛感しか残らないのではないだろうかと考えさせられる。「やられたらやり返す」という人間関係は、その時の欲求の発散にはなるかもしれないが、紛争を次々に誘発させ、不安感を増幅させる面も併せ持っている。この人間関係から生まれるのは、被害と加害の連鎖であり、あるいは終わりの見えない紛争に向かわせる怒りと不安ではなだろうか。

ほんの四半世紀前にさかのぼれば、人に多少迷惑をかけても、「お互い様」と言い合っていた時代があった。一人では生きていけないとわかっていたので、「持ちつ持たれつ」というギブ・アンド・テイクの精神が存在していた。それは家庭でも学校でも職場でも、お互いの存在を尊重し、多少のことは大目に見て、和を尊しとする関係が生きていた。今の時代はどこかそれが忘れ去られ、関係の希薄さのなかで被害と加害がぐるぐる堂々巡りをしているようにさえ感じられる。「やられたらやり返す」という関係から生まれるものは何なのかをもう一度考えてみたいものである。今ひとつ冷静になって、「お互い様」「持ちつ持たれつ」の関係とそれとを比較してみたい。そして、「被害と加害の逆転現象」が生じないようにするためには、何より被害者と加害者を作らないようにすることが先決であり、そのことを虐待に当てはめれば、子どものケアも親のケアも含めた「まるごとの支援」が今や求められているのである。

